

自閉症児における他児への呼名行動の獲得

The acquisition of calling name behavior to other children for the autistic child

星山 伸夫^{1) 2)} Nobuo HOSHIYAMA福島大学大学院教育学研究科¹⁾

(Graduate School of Education, Fukushima University)

国際メディカルテクノロジー専門学校²⁾

(International Medical Technology College)

【研究目的】

本研究では、即時反響言語が特徴的な学童期自閉症児に文脈が理解しやすいパターン化した伝達場面（呼名場面）を設定し、他児の名前を呼ぶ“呼名行動”を形成する指導を試みたので報告する。

【方法】

- 1) 対象児：生活年齢7歳3ヶ月の養護学校小学部に在籍している精神遅滞を伴う自閉症男児1名を対象とした。F総合病院小児科において「自閉症」と診断を受けていた。新版K式発達検査では、認知-適応領域DQ65、言語-社会領域DQ46で、視覚認知・構成能力の発達に比し言語発達の遅れを認めた。対人的な発信行動は少なく、即時反響言語や奇声をあげることが多く、集団活動への参加は消極的で他児との交流を促すことが困難であった。
- 2) 指導期間：対象児はF総合病院小児科療育外来で言語聴覚士による週1回40分の言語訓練と1時間のグループ訓練（本対象児とダウン症児5名の計6名）を受けており、呼名行動の獲得を目的とした指導はグループ訓練中の開始時約15分と楽器を用いたリズム遊び導入時の約10分を利用して行った。
- 3) 前訓練：他児（ダウン症児）5名の名前の理解・呼称訓練を行った。5名の顔写真をみて正しい名称を正しく呼称することを達成基準とした。
- 4) 標的行動：対面横1列の椅子に着席した各児の顔を見て指さし、対応する名前を「〇〇ちゃん」と音声で呼名し、挙手と返事をさせた後、次の児に順次この手続きを遂行し、5名全員の呼名行動を完遂することとした。ただし、本児が指さした各児と呼名が一致していれば正答とみなし、順序については問わなかった。
- 5) 指導手続き：呼名行動を形成する指導ステップとして、A.訓練者の音声モデルの模唱と身体的ガイダンス→B.Voice Output Communication Aid (VOCA) を利用した視覚的プロンプト（顔写真）と録音音声の模唱→C.コミュニケーションボード（顔写真と仮名文字）→D.コミュニケーションボード（顔写真のみ）を設定し、プロンプト刺激以外の弁別刺激（対

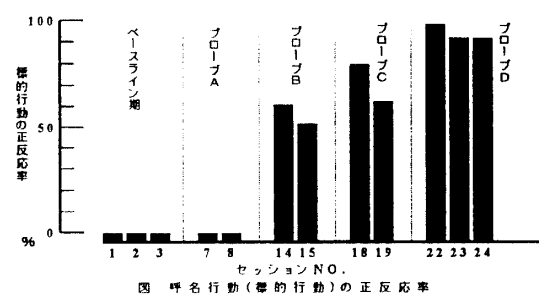
面横1列の椅子に着席した各児の存在）へと移行を促進するため、段階的にプロンプトをフェーディングした。

6) ベースライン・グループ：訓練者が、グループ訓練開始時に出席をとる場面で、対面横1列の椅子に着席した他児5名に対し、左から順に呼名し挙手と返事「はい」の応答させる呼名行動のモデルを対象児に見せた。その直後に、対象児と訓練者が入れ替わり、訓練者の「名前を呼んであげて」の教示で同様の呼名行動が特別なプロンプトなしで生起するかをベースラインとした。グループは指導ステップA～Dの各指導ステップ後にベースラインと同様に行った。1セッション10試行実施した。

7) 結果の処理と信頼性：全ての場面をビデオ撮影した録画テープから評定者2名の一致率を算出した結果、一致率は95%であった。

【結果】

呼名行動（標的行動）のベースライン及び各指導ステップ後のグループの結果を図に示した。VOCAを利用した指導ステップB後のグループから正反応が生起するようになり、第22セッションで全てのプロンプトを撤去して100%の正反応率が得られた。



【考察】

呼名行動を形成する技法として、指導者の音声モデルを模唱させる技法は、即時反響言語が影響し、指導者のモデルが先導するため自発性に乏しく限界があった。これに対して本児の優れた動作性能力（視覚認知・機器操作）を活かし、即時反響言語の特性を利用したVOCAやコミュニケーションボードを媒介とした技法を導入することが自発的な呼名行動の獲得に有効であることが示された。